



(複製製図)

VIEW OF EITAI BRIDGE FROM FISH-MARKET, NUMAZU.

▲望ヲ橋代永リヨ岸河魚 勝名津沼

絵葉書に見る旧永代橋2

昭和元年(1926)に竣工し、昭和62年(1987)にその役目を終えた鉄筋コンクリート製の桁橋の旧永代橋の写真は通巻229号で紹介しました。今回は、それ以前の永代橋の姿を絵葉書の写真で紹介しします。

上の写真の印刷された絵葉書の裏側、切手を貼る宛名面には下部の3分の1程を区切る野線が引かれ、通信欄として使うことができるようになっています。この形式の絵葉書は、明治40年(1910)から大正7年(1918)まで使われました。

写真の下には「沼津名勝 魚河岸ヨリ永代橋ヲ望ム NUMAZU, VIEW OF EITAI BRIDGE FROM FISH-MARKET (蘭契社製)」と記されています。当時通横町にあった書店の蘭契社が発行したものです。

魚河岸がFISH-MARKETと訳されているところから、魚市場のような場所から見た永代橋の光景ということになります。

御成橋のすぐ南は魚町と呼ばれ、魚を取り扱う五十集商人の町であったといわれていますが、大正期後半からは永代橋よりも下流側の宮町に魚市場が置かれ、

昭和に入ってから狩野川河口近くの内港が整備されると、戦後その隣接地に移転しました。ここには永代橋の南に移転する以前の魚町の魚河岸の姿が残されていることとなります。

発動機船と和船から荷下ろし作業をしている人々とボテ売りのような担ぎ棒を担いだ人が写されています。

船の左後方に写っているのが木造の先々代の永代橋です。明治33年(1900)に架橋され、嘉仁皇太子と節子妃が渡り初めをし、その慶事を永代に伝えるために名付けられたといわれています。

その後流失、復興をくりかえし、大正12年(1923)に合併直前の沼津町と楊原村に狩野川架橋永代橋架橋免許人から無償提供されました。その構造は、先ずばみになる3本の丸太柱を立てた橋脚と橋脚の間に、角材を鈍角二等辺三角形に、互い違いに3つ組んだ骨組み(垂直補強材付きのワーレントラス)で補強した橋桁が乗せられ、それが8単位以上連結されています。この構造はトラス構造と呼ばれ、変形しにくく、橋桁を長く延ばすことができるもので、この橋は構造上、木造のトラス橋ということになります。

駿河湾の漁

森田 安男さんの漁話

我入道のタチ (タチウオ) 釣漁 その1

タチウオ (写真1) とは、漢字で書くと「太刀魚」となります。その名の通り太刀のように長い魚で、ウロコはなく体はきらきらと銀色に輝いています。このタチの皮の銀色はグアニンという色素で、古くは模造真珠などの工業原料として利用されており、大正時代に大阪の業者が水産会を通して江浦の漁業組合へタチウオの皮の取引を持ちかけてくることもありました。

タチの旬は12月初めから2月いっぱいまででになります。淡泊でありながら脂ののったタチは沼津の人たちに好まれており、焼き魚にしたり、醤油干しにして食されています。

我入道の漁師は、12月から2月末まではヤリイカ釣りを行っていましたが、徐々に釣れなくなっていきます。ヤリイカの漁獲が減ってもこの期間はクロザメの延縄漁 (通巻225号) やアナゴモジリ漁 (通巻227号) で収入を得ることができましたが、これらの漁は体力を使うきつい漁でした。60年ぐらい前からヤリイカに変わるように魚価の高いタチが増えていきます。漁師はその時に釣れる魚を釣っていますが、ほぼ1年中タチが釣れるようになっていったため、体力的に楽に行うことができるタチ釣漁へ移行していきます。現在では、タチ釣漁が我入道の漁師の生計を支えていると言ってもいいほどにまでなっています。特にタチの旬に近づく10月頃から2月までは、盛んにタチ釣りが行われています。

沼津周辺のタチは、水深30尋 (約45m) から40尋 (60m) ぐらいのところに群れて生息しています。旬である冬場に入ると千本沖の方で釣れるようになり、寒くなると今沢沖の海底が急に深く落ち込むところでよく釣れるようになります。春先になると牛臥山の下あたりに出てくるようになり、夏場に入ると江浦湾の方でも釣ることができるようになります。

タチ釣りは、日没から夜明けにかけて行う漁です。日没直後の時間帯をヨイマジミ、日の入り直前の時間帯をアサマジミと言いますが、この二つの時間帯がタチ釣りにとって最も良い時間帯になります。ヨイマジミまでにタチ釣りのポイントに着けるように出港し、ヨイマジミになるまで待ちます。船に備え付けた灯りを照らすと、タチが船の周りに集まってくるようになります。タチの銀色の体に灯りからの光を浴びてきらきらと輝く様子が船上から確認できます。そこに釣りの仕掛けを落として手釣りで釣っていきます。そしてアサマジミの釣りを終え、朝6時に始まる魚市場での競りに間に合うように引き上げます。

森田さんが漁を始めた昭和30年 (1955) 頃のタチ釣りの仕掛けは、我入道のイカ釣漁 (通巻229号) で紹介したビシ (写真2) を使った仕掛けでした。ビシの2本の腕からそれぞれ釣糸が伸び、先端に釣針がつきます。遊漁のタチ釣りでは現在でもこのような仕掛けを使うことがありますが、この仕掛けだと最大で2匹しか釣ることができません。多くのタチを釣ろうとするには一人で3本も4本も仕掛けを操ることになります。そうすると狭い船の中を右往左往することになり、対処することが難しくなってしまいます。そこで森田さんは22、3歳の頃、ビシによる仕掛けではなく、1本のミチナ (幹縄) にエダ (枝縄) を1.5m間隔に8~9本程度つけ、その先端に釣針がつく仕掛けを考案して使うようになります。これは我入道で古くから行われていたムツ釣りの仕掛けをタチ釣りに応用したものでした。

次号へ続く (話：森田安男氏 昭和15年生まれ 沼津市我入道在住)



写真1：森田さんが釣り上げた体長約1.3mのタチ

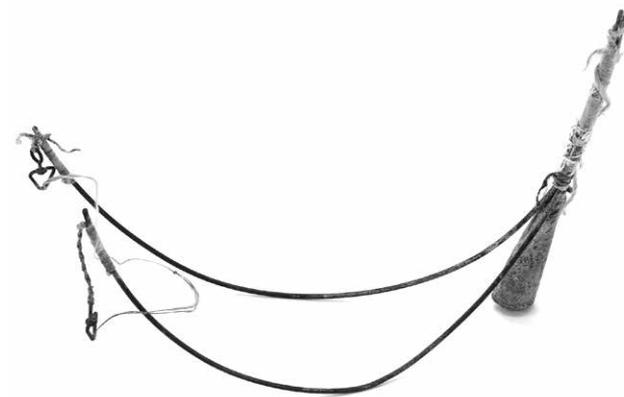


写真2：古いタチ釣りの仕掛けに使われたビシ (沼津市歴史民俗資料館所蔵)

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■香貫・我入道編 その3 我入道・牛臥

●景勝地「牛臥」の整備 牛臥山(旧字山宮前)の海浜部は沼津市の通称「牛臥山公園」として整備されている。文政11年(1828)の絵図では浜水門の出口に「古湊」と記し、舟割石60間の波除け石出し(鉤形防波堤)を描いており、高島ノ鼻までの牛臥海岸は「横浜」と記した砂浜海岸であった。今も踏鞴製鉄の原料となる「砂鉄」分布の目立つ浜であり、かつて公園の東側3分の1は蕪山の江川家が所有し、大砲の試射場であったという。その後、跡地は高級別荘地として東京方面の3軒に分譲された。

明治22年(1889)の東海道線の開通を契機として島郷一带の公園整備と別荘地開発が進む中で、21年頃から島郷牛臥海岸に海水浴場、大朝神社北側に世古運動場が整備されている。28年頃までに世古六太夫が経営した「三島館」が建てられ、多くの逗留客を迎えて賑わった。遠くに象山(徳倉山・大平山)や鷲頭山、寝釈迦山(葛城山・菟端丈山)を望み、淡島や瓜島(西郷島)を、近くに島郷の松原や砂浜を見る、正に一幅の絵の如き風光明媚な地として一時代を画した。

また古くに山宮山と呼ばれた牛臥山の南麓から西寄りの小浜に向け、「大山邸」に自動車を通すための「切り通し」が造られ、22年に大山巖元帥の別荘が建てられた。

昭和9年に三島館を改称し「沼津ホテル」として営業された跡地は戦後更地になり、昭和28年に東京急行電鉄の私有地となり、牛臥海水浴場として海水浴客のほか、埋め立て地は市民憩いの保養の場となった。その後高度成長期に入ると観光開発が進み、一带は「東急バンガロー」となっている。大山邸跡も昭和40年頃まで東急の小浜海水浴場の管理施設に利用されていた。2棟あった和洋折衷の平屋の建物は老朽化し、潮風に当たった木造家屋は傷んで腐食も進み、荒廃した旧大山邸は残念ながら平成6年に撤去されてしまった。

今や石垣・階段に当時の面影を残すのみで、映画「わが母の記」のロケ地ともなった渚や周辺の自然環境の一部は守られている。公園の四阿(本邸跡)に行けば、当時の洋館のバルコニーの柵越しに、はるか大瀬崎や真城山・達磨山の山並みと内浦湾を望んだ残影が確認でき、今も懐かしい心象風景として思い出す。

砂浜海岸の「小浜」に続く牛臥山北西寄りの荒磯は、文政11年(1828)の絵図で「字姥ケ懐」と記され、流紋岩の海底溶岩ドームの一部で、奇岩のタフォニ(塩風による風食)の崖地である。タフォニと呼ぶ凹みの中で、岩石表面に付着した塩類の結晶が乾燥時に剥離を起こし、とても奇妙な造形物を作り出している。

岩石海岸の通称「乳母ケ懐」の海食地形の岩場には、

小規模な「海食洞穴」も存在する。芹沢光治良が講演などでも触れているように、地名起源の乳母が抱える懐のような日だまり、風除けの地とともに印象が深い。北側は我入道の地で、崖上に秋葉神社の小さな祠がある。下香貫字外新田や曼陀ヶ原の地で、前浜は葬送儀礼の「浜降り」に使われた。その地に芹沢光治良の文学碑が建てられ、修復した碑も再び風化が進む。

ランドマーク(陸標)の「高島」の岩は波浪や塩風に耐えた中、大変不思議な形のままで200年以上も残り、かつて灯明台を築いた地の様でもある。高島は牛臥山の尾根筋が浸食されて一部が残存したものだが、離れ岩の島ではない。前面の海には岩礁が多く、高島ノ鼻の磯に今では防波堤が構築されている。

この地で世古六太夫が牛臥・我入道の霊地を世に残すことに力を注ぎ、日蓮が居を構えたとの推定地(日緬寺前)へ祖師堂を建立している。文永年中(1260年代後半)日蓮上人がこの地を過ぎし時代か、日蓮が上陸の「舟繋ぎ岩」の推定地もその近辺である。宅地開発に伴い、岩塊の一部を移設した日緬寺境内には「舟繋ぎ岩」と刻んだ円柱も移されている。袋状の古湊を想像したか、山宮前(現牛臥)の凹地に推定したらしい。

その後、昭和11年から日蓮の遺蹟を掘り起こし、顕彰や宗教的な活動として戦後の23年に道場を築いたのが今日の日緬寺である。ただし伝承ないし伝説の内容に限らず、当時の解釈などでは整合性が弱い。

●日蓮と「曼陀羅ノ松」 日蓮が荒れる海嘯に対して曼荼羅(曼陀羅)を懸けたという伝承の「曼陀羅ノ松」がある。狩野川河口が牛臥側と仮定してもラップ状に開いておらず、海嘯(潮津波)の現象も起きない。津波の襲来とすれば建長2年(1250)以前となるが該当するものはなく、甚だ疑問が残る。現在の「曼陀羅ヶ原」(旧字曼陀原)では、大変低い位置に松や松林がある。入り口の根上がり松の「曼陀羅ノ松」は昭和20年頃枯れたというが、伝承地・推定地として地形的に無理があり、災害を回避できるような状況には成り得ない。



View of Shidaura. ▲望ヶ島濱リヨ山臥牛 景風ノ浦静

絵葉書 静浦ノ風景 乳母ケ懐 小浜から高島ノ鼻を望む

「高潮」ならば後の汐除堤の構築も合点がいくし、たびたび襲った西側の我入道海岸故に、浜堤を越えて襲来したために荒廃が進んだものと見られる。牛臥山の北側、保安林構築以前において「曼陀羅ヶ原」の高所の一角で、津波や高潮の襲来を防ぐために、日蓮が唱えたならば理解しやすい。ただし、伝承と史実には大きなズレがあり、整合性もまた弱い。同じく伝承そのものも、時代で変化ないし歪曲されて来ている。

牛臥山の高島寄りか北西の裏側の地か、日蓮が牛臥の「舟繋ぎ岩」（位置不詳）に小舟を繋いで上陸し「我、佛の道に入らん」と言って、我入道という地名が生まれたとする。この地名や村名に関する説話の元は大正7年発行の「楊原村沿革誌」である。我入道を日蓮が通過する時に「我入る道なり」と言ったので、音読を村名にした点を紹介し、地元住民の口碑を肯定している。

また「この地は往昔風浪の被害が甚だしく、日蓮上人はこれがために大曼茶羅を書いて山宮山明神に昼夜籠って祈願し、風浪災除の祈願をなしたことがある」との伝説に対して、「当時曼茶羅を懸けた地として曼茶羅ヶ原という地名と古跡がある」とした。この説は、やがて日蓮宗（現立正宗）日緬寺などでの住職による講話で強められた見方となっていく。

大正5年発行の『駿東郡誌』では「往昔此辺津浪押上げ、田園を荒らしたること多く、時に日蓮此地を過ぎ、神社へ曼茶羅を掛けて祈り、靈験により津浪の害を避く、今社の脇に曼陀羅ヶ原の地名残れり、其頃よ

り潮留大明神と称せり」として、下香貫の山宮の境内地、山神社（後の大朝神社）での出来事を紹介している。

やはり我入道は「香貫郷」の一角を占め、鎌倉期から南北朝の「香貫郷」より後に分村した経緯から見ても、古くはカヌキト（カヌキド）からで、香貫の湊の意で「香貫津」とした。やがてカヌキドからガニウド（ガニユード）の我入道に訛り、さらに当て字通りの読みのガニユウドウへ転訛したのと言えよう。

一方、実際に日蓮が上陸したのは狩野川河口を船で上った下河原の地で、八日堂伝承地の旧跡は千本常盤町（旧字二反田）の日蓮宗妙海寺墓地の北側、初期の草庵「如来堂」である。八日間、正月八日の早朝まで祈ったのは「風涛の災害」に対してで、風浪や津波・高潮の襲来を防ぐための読経である。日蓮真筆の曼茶羅に関係している点でも妙覚寺と似た話である。やはり風害や高潮被害の際立った砂礫州や千本砂丘背後の微高地、沖積段丘（自然堤防）での説話において共通する。並列する砂丘鞍部で風とともに、容易に越流する凹地の背後に位置し、農民・漁民を苦しめた。正嘉2年（1258）1月8日夕刻から津波除災の祈禱をしたとの異説もあるが、それ以来正月7日より8日にかけて下河原の妙海寺八日堂で法会を行っている。

なお隣接する日蓮宗妙覚寺でも日蓮が諸寺派遊の帰途、建長2年12月（1250）に留錫して「此地風浪災害消除の祈禱をなす」とし、同じ八日堂の伝承があり、妙海寺とともに八日間の祈禱が今も行われている。

資料館からのお知らせ

令和3年度企画展の開催について

本年度の企画展「生魚走る－沼津の海産物輸送と交易－」を今回令和4年2月5日(土)から2階展示室で開催します。

国指定漁具コレクションの中から交易運搬用具を紹介するとともに、はるばる江戸や甲州にまで運ばれた



サカサダル（逆さ樽） 鮮魚運搬用の上が狭い樽

鮮魚（生魚）や加工品の運搬と流通にもスポットを当てます。

また、今回は、企画展に合わせて職員によるギャラリートークも予定しています。詳細はホームページまたはポスターをご覧ください。

内浦湾で水揚げされた鮪や鯛を生のまま、腐らせず、いかに早く江戸や甲府に届けるか、その苦労と努力の一端に触れてみてください。ご来館をお待ちしています。

沼津市歴史民俗資料館だより

2021.12.25 発行 Vol.46 No.3（通巻232号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp